平成 14 年 7 月 19 日（第三種郵便物認可）　　令和 6 年 12 月 25 日

地域母子保健福祉情報紙 No.287

親子保健

おやこほけん

公益社団法人 母子保健推進会議

定款第１章第３条　目的（抜粋）
国及び地方自治体
関係諸団体と連携協力して
母子保健の重要性を啓発し
母性の健康を守り　たかめ
心身ともに健全な児童の
出生と育成に寄与してまいります

「令和６年度　健やか親子 21 全国大会（母子保健家族計画全国大会）」開催

式典であいつする佐藤会長

「令和６年度健やか親子21全国大会（母子保健家族計画全国大会）」が11月21日（木）･22日（金）、宝山ホール（鹿児島市）を会場に開催された（主催：こども家庭庁、鹿児島県、鹿児島市、恩賜財団母子愛育会、日本家族計画協会、母子保健推進会議）。

今年度の大会テーマは、「未来へつなごう！～“子は宝”すべての子どもが健やかに育つ未来を目指して～」とされ、大会式典では、長年地域で母子保健の向上、こどもの健やかな成長のために尽力してこられた個人・団体に対して、内閣府特命担当大臣表彰ほか、各主催団体の会長表彰が行われた。母子保健推進会議会長表彰では、個人49名、１団体に対して、佐藤拓代会長より表彰状を授与した。

最新の情報を得、日ごろの活動にアイディアも

式典に続き、午後からは特別講演が２題行われた。まず、こども家庭庁成育局母子保健課木庭愛課長が「最近の母子保健を取り巻く状況」をテーマに、福岡大学医学部小児科学講座主任教授、永光信一郎先生が「１か月健診と５歳児健診に係る動向及び今後の展望」をテーマに講演した。

会場ロビーでは母子保健推進員等の活動展示

２日目は、テーマを「切れ目のない親子の支援を目指して」としてシンポジウムが行われた。第Ⅰ部は、大分県立病院病院長、佐藤昌司先生を迎え、「妊産婦メンタルヘルスの診かた～ガイドラインありきではなく、ひとりひとりの心を診る～」をテーマに基調講演が行われた。第Ⅱ部は、佐藤先生をコーディネーターとし、パネラーに堂園クリニック堂園光一郎院長、さんSUN助産院大橋久美子院長、日置市こども家庭センター二禮木祐子統括支援員、NPO法人親子ネットワークがじゅまるの家野中涼子理事長など、妊産婦さんや親子を支えるさまざまな立場の方を迎え、パネルディスカッションが行われた。

会場ロビーでは、母子保健推進員協議会が日ごろの活動を紹介する活動展示、本会議が実施している「8020の里賞（ロッテ賞）」の各受賞団体による作品や活動を紹介する展示が行われた。来場者が展示をしている団体の方に質問するなど、アイディアや情報の交換も行われた。

今月のページ

「令和６年度　健やか親子21全国大会（母子保健家族計画全国大会）」開催 … 1
創意工夫あふれる地域活動とこども家庭センター
母子保健推進員等および母子保健関係者全国集会開催 …… 2～4
かけがえのない人生を私らしく歩んでいくために… ～ Caree＆FamilyPlannig ～
NPO法人とちぎみらいwithピアの活動から …… 5
紙上セミナー：8020の里づくり「むし歯予防のための卒乳時期」…… 6
役立つI.E.C.優れもの／令和６年度 子育て世代支援者養成セミナーのご案内／編集帖 … 8

創意工夫あふれる地域活動と

特別講演２題に続き、各団体による併設集会が行われ、本会議は、「母子保健推進員等及び母子保健関係者全国集会」を開催した（共催：全国母子保健推進員等連絡協議会・本会議、後援：こども家庭庁、協力：株式会社ロッテ）。

本集会では、「8020の里賞」の表彰および講評、静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科の仲井雪絵教授から講話「生活の中ではぐくむ子どもの口腔機能」を、特別講演では「母子保健施策の動向」について、こども家庭庁成育局母子保健課生殖補助医療係の臼井麗係長が講演を行った。本稿では、「8020の里賞」についての講評と後段で行ったシンポジウム「妊娠期からの『傾聴・共感・承認』を目指して」について詳報する(他は次号にて紹介)。

「8020の里賞(ロッテ賞)」は、健やか親子21、8020両国民運動の一層の推進と乳幼児期からの健康づくりの重要性の啓発を目的に地域の地道な活動を表彰しようと平成21年度に本会議が創設した。審査委員長を務める公益社団法人日本歯科医師会山本秀樹常務理事が優秀賞2団体、佳作賞2団体の活動について講評を行った。

【優秀賞】

藤沢市歯科衛生士の会スマイル・藤沢市健康づくり課

保育園、親子教室、子育て広場等で口腔機能管理の習慣化を啓発し、むし歯予防の原因、予防法が身につけられるよう、エプロンシアター、むし歯になりにくいおやつ選び、歯磨き啓発用パネル、ポスター、紙芝居等さまざまな媒体を制作し、市の行政職と歯科衛生士会が協力しながら展開したことが高い評価につながった。

8020 の里賞受賞作品の展示

子育て支援グループ「マザーズスマイル」(兵庫県西脇市)

こどもの成長には保護者、家庭、地域の役割が非常に大きく就学前のこどもたちの生活習慣の定着が重要と、こども園、保育園等で０歳から５歳児とその保護者に対して健康劇等を行っている。さらに持ち帰りグッズを作成し、家庭での振り返り、継続した生活習慣の見直しができるようにしたことが評価につながった。

【佳作賞】

嬉野市母子保健推進協議会（佐賀県）

園児を対象に、歯磨き教室、手づくりのむし歯予防紙芝数種を制作するなど、長年むし歯予防の啓発に取り組んでいる。どの園児にもわかりやすくと、紙芝居は大きくしペープサートや動き、効果音などを取り入れた長年の活動が評価された。

豊見城市母子保健推進員協議会（沖縄県）

手づくり教材「つながるいのち」と題し命の誕生、大切さを伝える胎児モデルと解説用パネルを作成し、こども祭りや産業まつり、両親学級などで展示、体験を行っている。受精卵から10か月までの胎児を作成、部位ごとの重さや大きさにまでこだわり、さらに子宮、羊膜、胎盤、へその緒をつけ、へその緒と胎盤は取り外しもできるようにした。本年度の「健やか親子21全国大会」のテーマ『“子は宝”すべての子どもが健やかに育つ未来を目指して』にも通じる活動ではと考える。

講評する山本審査委員長

【基調講演】

妊娠期からの「傾聴・共感・承認」を目指して

公益社団法人 母子保健推進会議
会長　佐藤　拓代

支援の隙間に落とさない、落ち込ませないためにどうしたらいいか。指摘することを見つけ出すのではなく、まず受容。関わりにくさのあった事例に支援した経験の共有。利用者が嘘をつかなくていい信頼関係の構築が必要。

支援者が切れ目のない支援だと思っていても、受け手側が、どこかに紹介してもらうとそこで切れ目が生じたと思っている場合もある。切れ目ないというのは、どこかに紹介する、つなげるのではなく、私たちはあなたのことが心配だから押しかけていくし相談に来てねというメッセージを送ること。問題点を探し出すアセスメント指向の出会いより、当事者をまるごと受け止め、物事が起こる前の人が人を育てることを支援したい。

こども家庭センター

母子保健推進員等および母子保健関係者全国集会開催

集会後段のシンポジウムでは活発な質疑応答も

【事例報告】

①「妊娠期からの切れ目ない支援を目指して～鹿児島市こども家庭支援センターの取組み～」

鹿児島市こども家庭支援センター
統括支援員　田中　千夏

鹿児島市は人口約59万人、出生数は4,425人（R4）、ここ３年あまり横ばいだったが減少傾向に転じた。

母子保健機能の５か所の保健センターと母子保健課、児童福祉機能のこども家庭支援センターが一体的な組織となり、子育て家庭の相談支援を実施している。令和６年度の開設から、母子保健課とこども家庭支援センターを同フロアに設置、いつでも顔の見える関係となっている。

「かごしま市子育てガイド」を毎年発行、妊娠期から年齢別に該当する支援を記載し、家庭訪問時にも持参し活用している。ホームページにも掲載している。

母子健康手帳の発行時には、全ての妊産婦に保健師・助産師等の専門職が健康相談を行い、継続支援が必要と思われる妊婦は、地区担当保健師と顔合わせを行うほか、プレママ事業や児童福祉機能へつなぐなどしている。健診記録や子育て情報などをパートナーと共有できる電子版母子健康手帳「まぐまっこアプリ」の導入も進めている。ハイリスク、虐待ケースなどに注力しがちだが、母子保健の土台であるポピュレーション事業を統括していくことも重要である。何人が母子健康手帳の交付を受け産婦健診につながっているか、こどもの健診の受診・未受診の数についてもしっかり見ていきながら支援している。

新生児訪問、未熟児訪問、こんにちは赤ちゃん訪問を全て専門職が実施、全数を把握している。特に支援を要するケースでは、母子健康手帳発行の際に顔つなぎした常勤の保健師が訪問し必要な支援につなげ、産後うつ対策や養育支援を実施。産婦健康診査のほか、小児科医等で育児支援を含めた親子相談を行う「産婦小児科等相談事業」と連携を図るなど、医療機関とも情報共有に努めている。

互いの違いを知り強み生かして

虐待予防については、こども家庭センターになったことを契機に、児童福祉側、保健センター側の受理一覧等が閲覧可能となり、相互にタイムリーに情報共有できるようになっている。今年度から母子保健と児童福祉の合同ケース会議を設置、互いの機能の違いの理解を深めることで、連携・協働がより強固となる。会議資料の作成時、ジェノグラムの捉え方が母子保健と児童福祉で異なることを初めて知った。児童福祉はこどもを中心に続柄を記すが、母子保健は母を中心に記録することが多く、母子保健の母が児童福祉では祖母にあたる。このような初歩的なところから始まり、少しずつ互いの違いやどういう目線で支援しているか、わかってきた。

母子保健は予防的アプローチだが、児童福祉は、以前は事後対応的なアプローチであった。合同ケース会議やサポートプランなどで支援を検討することで、より予防に傾いてきたと実感している。

母子保健（=ポピュレーションアプロー

チ）は、すべての母子に出会えている強みをこども家庭センターでも生かすとともに、連携する機関の機能・事業を知り、当事者の思いをつなぐよう、個々やチームの力を地道に積み上げていきたい。

【事例報告】

②「伴走型の切れ目ない支援と母子保健推進員の活動」

薩摩川内市保健福祉部市民健康課
保健師　寺迫　安代
母子保健推進員　久永　文子

薩摩川内市は、面積が約682㎢と鹿児島県内でもっとも広い自治体である。市が誕生した20年前の出生数は1000名を超えていたが、令和５年度は653名と約４割減少し少子化が進んでいる。離島の甑島地域は、産科・小児科がない。

令和６年４月に設置された、こども家庭センターは、子育て支援課（医療費の助成・保育園等）、社会福祉課（要対協・DV等）、市民健康課で機能を担っている。市民健康課では、助産師、保健師が常駐し、サテライト「なないろ相談室」では個別相談や各種相談、教室を実施している。母子健康手帳交付時は、保健師が全員と個別面談し、妊娠８か月と産後３週間には、助産師・保健師が全員に電話をかけている。妊娠８か月と生後２か月（乳幼児全戸訪問事業）では、同じ母子保健推進員が訪問、訪問後は、地区担当保健師と情報を共有している。

母子保健推進員は、保育士、看護師、保健師、歯科衛生士、教員等の有資格者41名で地区担当制をとっている。特定妊婦・ハイリスク妊婦等は地区担当保健師が訪問している。パンフレット、相談案内など配布物を取り入れるようになってから受け入れが良くなり、母子保健推進員の訪問がしやすくなった。また、アンケートと記録票を作成し、訪問時の気になる点を保健師に報告し、必要に応じて保健センターから連絡を取っている。それにより、母子保健推進員ができるだけ負担なく安心して活動できている。

事例報告は左から薩摩川内市の久永さん、寺迫さん、鹿児島市の田中さん

母子保健推進員の久永さんは、中学校での特別支援教育の支援員、放課後デイサービススタッフなどこどもや保護者に関わる仕事に従事しながら母子保健推進活動を行い、活動歴は13年になる。仕事の合間にアポなし訪問をしているが、活動を通して意識していることは、相手に配慮した声掛け。訪問先のお母さんの環境はそれぞれ違う。心配なことはないかと聞いても、最初は大丈夫と答える人が多いが、話していると、大丈夫と言いながら意外に多くの話をしてくれる。傾聴（今、どんな状況なのかな？）、共感（辛かったですね）、承認（自分を責めなくていい、それでいいんですよ）などが大切。「見守っているよ」のメッセージを意識し、困ったときに相談できる保健センターなどの必ず伝え、つなぐ役割も大切にしている。

こども家庭センターと母推活動

【質疑応答】

Q　合同ケース会議で大切なことは、またどのように実施しているか。

A　鹿児島市田中保健師：双方の意見をぶつけ合い、いろいろな考え方があることを知ることが大事ではと考えている。ガイドラインにもあるように、自分はファシリテーターであってジャッジはせず、出てきた意見をまずはやってみようという方向で行っている。日程調整は難しいので、月１～２回の定例日を決め、必要ない時には開催しないという実施方法。

Q　薩摩川内市の母子保健推進員は、昔から専門職がやっていたのか。

A　薩摩川内市寺迫保健師：以前は地域の方々にお願いしていた。各自治会で地区担当を決めていた。乳児家庭全戸訪問事業の開始より専門職に切り替えていった。

Q　薩摩川内市で各地区担当について、どのようにお知らせしているのか。

A　寺迫保健師：案内チラシとともに、推進員の許可をもらったうえで、母子手帳裏面に名前と電話番号を記載し、手帳交付時に「その推進員さんから連絡が来るからね」と伝えている。

Q　全員対象の妊娠８か月訪問は実際どれくらい会えているのか。

A　寺迫保健師：まだ仕事をしている方も多く、実際には電話も多いのが現状。母子保健推進員とは別に、「なないろ相談室」の助産師らが全員に電話しており、どちらもつながらない場合は、地区担当保健師が産後に訪問している。

Q　サポートプランについて

A　鹿児島市田中保健師：母子保健では、対面で本人ができること、次にすることを互いに決めていく。当事者から「これを相談したい」というときにサポートプランがあると便利だが、サポートプランのための支援でなく、まず私たちがサポートプランをどう作っていくかが大切で、それを悩みながらやっている。

かけがえのない人生を私らしく歩んでいくために…
～Career（キャリア） & （アンド） FamilyPlannig（ファミリープランニング）～

NPO法人とちぎみらい with ピアの活動から

女性の社会進出のうねりは、キャリアを積んで活躍する女性の増加という好ましい社会現象をもたらしてきていますが、その結果、晩婚化が進み、高齢出産を余儀なくされているとも考えられ、それはとりもなおさず、日本の急激な少子化に拍車をかけることに連動していくようにも考えられます。そのような中、妊娠・出産の当事者である世代の若者は、妊娠・出産・子育てに適齢期があることや高齢出産のリスクについて知っているのでしょうか。

本法人の若者会員（思春期ピアカウンセラー：通称ピアっ子）たちは、キャリア（将来の仕事）プランや未来の家族計画：ファミリープランを考え始めている同世代の若者に対して、妊娠・出産に焦点を当て、自分の理想とする人生設計（ライフライン）を考える場を提供したいと考えました。具体的には、キャリアを積んで自分の夢を実現することは素敵なこと、同時に愛する人と幸せな妊娠・出産・子育てをすることも素敵な人生であることを共感・共有し、そのために妊娠・出産・子育ての適時期と、高齢出産についてのメリット・デメリット等の情報提供を行い、これからの自分の理想とする輝いた未来のプランを考えるきっかけづくりを目的として、事業を実施しました。

日　時：令和６年８月25日（日）
13:00～15:30
場　所：オリオン通りイエローフィッシュ
対象者：高校生・大学生男女15～20名程度

信頼関係を築き話しやすい雰囲気で

受付では、受講生はピアネーム（呼んで欲しい名前）を記入し、首から下げます。このピアネームが受講中の呼び名になります。

まず、本事業の目的等を説明し、受講生同士のラポール：信頼関係を築くために、アイスブレイクとして「バースデーサークル：誕生日の輪」を行い、次いでエンカウンターのうち「色いろいろ：自分や仲間を色にたとえ、そのイメージを伝え合う」をグループ別に行い全体が温かい雰囲気になり、さらに「ねぇ聞いて！私の夢」を語り合うことで、将来の夢・就きたい職業を仲間同士で分かち合い、これからの自分のキャリアに対する意識を高め、そして、今回の目玉でもあるライフラインづくり：人生設計に移りました。

キャリアとファミリープランニングを一体化しライフラインに描いて

まず、ピアっ子が自分のライフラインを紹介し、それを参考に、受講生は自分のライフラインを描きます。その際、「発表もあるため、描きたくないことは描かなくてもよい」ことを伝えます。そしてグループ内で発表し合い、さらに全体で感想を分かち合いました。受講生からは「最初は難しいと思ったが、意外とスラスラ描けた。母と将来のことを話していたからだと思う」「描きながら迷ったところは、仕事も頑張りたいし、結婚・子育てもしたい、と考えると晩婚化してしまう」等、キャリアを大切にしようと思うと晩婚化することが、複数の受講生から聞かれました。その後、妊娠（妊孕力）、出産の適齢時期と高齢出産のメリット、デメリット等について情報提供をし、それを踏まえ再度ライフラインを構築しました。

２回目のライフラインを描き終えた後の受講生の感想は、「妊娠、出産がライフラインに大きく関わることが認識でき、家族計画、避妊の大切さがわかった」「キャリアも大切にしつつ、35歳までに出産したいことを考えると、結婚、出産の時期、こどもの人数等が具体的になった」等の感想が出ました。このことは、これから妊娠・出産の適齢期を迎える若者にとって大きな財産になったのではないでしょうか。ピアっ子からの情報提供を参考にしながら、未来の自分を真剣に考える機会になり、漠然としていたキャリアとファミリープランが一体化した夢が具体化する時間になったようです。その後、描いたライフラインを幸せに実現するために、様々な避妊法の情報提供がなされました。終了時、受講生のうれしそうな笑顔が印象に残りました。

終了後受講生からは「これからの人生を考えるきっかけとなった」「未来を考えるのは難しいけれど、キャリア、結婚、出産を具体的に考えることができた」「ライフラインを考えるだけかと思っていたが、知識（情報提供）が増えたことで、ライフラインに生かすことができる」「今回は大学生が主な受講生だったが、高校生等多くの若者に聞いてもらいたい、広めたい。」等の感想が出ました。

今回の事業は、若者の未来に焦点を当て、若者同士が自由な雰囲気の中で自分の未来について語り、キャリア、結婚、出産等について真剣に考えました。それは、少子化を防ぐ一助にも成り得るのではないかと考え、本事業を継続して取り組んでいきたいと考えています。

特定非営利活動法人とちぎみらいwithピア
思春期事業リーダー　葭葉　敬江

紙上セミナー SEMINAR

8020の里づくり

むし歯予防のための卒乳時期

各自治体においては、乳幼児に対する健康診査が年齢ごとに細かく実施されていますが、その中で１歳６か月児と３歳児への健診は母子保健法に基づく法定健診として歯科健診も行われます。おそらく、母子にとって初めて受ける歯科の受診であることが多いのではないでしょうか。

そこでは、歯科医師が口腔内を診察して、歯の萌出状態、むし歯の有無、歯垢や歯石の付着状況、噛み合わせや軟組織の異常の有無などを判定します。いきなり寝かされてまぶしいライトを当てられ、知らない白衣のおじさん（おばさん）に口の中にミラーを入れられるという行為は、小さいこどもにとっては大変なストレスなようで、１歳６か月児においてはほぼ100％が大泣きしてなかなか口を開けてくれません。診察するのも大変です。

ただ、これが３歳児になると、大人しく口を開けてくれる協力的なこどもも増えて、成長を感じられるようになります。

１歳６か月児における授乳リスク

そのような大変な口腔内診査を終えると、診察結果や事前の問診調査をもとに、歯科医師および歯科衛生士による保健指導が行われます。

問診では普段の生活環境や食事の内容、特に甘いものの摂取量や与え方、歯みがきの実施状況などをチェックしますが、１歳６か月児においては、ミルクの与え方について指導が行われることがあります。

すでに卒乳をしているこどもが多いですが、まだミルクを飲ませている、母乳を与えているという母親もそれなりにいらっしゃいます。その場合は、できれば卒乳をしましょうという指導がたいてい入ります。では、なぜ卒乳をしないといけないのか、どんな悪影響があるのでしょうか。

まず母乳や粉ミルクにはむし歯の原因となる砂糖は入っていませんが、乳糖という糖分が入っています。一般的に授乳のみではむし歯の発生に対して大きなリスクはありません。

しかし、離乳食が始まり、むし歯の原因となる砂糖を含む食品や飲料類をとり始めるようになると、授乳に対するリスクが高まってきます。１歳６か月児では前歯（乳切歯、乳犬歯）に加えて奥歯（乳臼歯）が生えていることが多く、歯の汚れも付着しやすくなります。そのため、授乳を続けると、１歳６か月ごろを境にむし歯になる確率が急に上昇してきます。

さらに、寝る前や夜間の就寝しながらの授乳は、こどもの口腔内にむし歯菌が増える大きな原因になります。寝ている間は、歯の汚れを洗い流してむし歯になりにくくしてくれる唾液の分泌量が減少し、むし歯の原因菌の活動が高まるためです。

ですので、夜間の時間帯の授乳は避けるのがよいですが、授乳しないと寝てくれない、落ち着いてくれない、といったお子さんもいますので、やめるのが難しい場合もあります。一概に「やめなさい」と指導するだけでなく、親子の関係や環境などを考慮してより良い方法を考えるのがよいかと思います。

哺乳瓶による授乳の危険性

また、哺乳瓶やシッピーカップ（蓋と吸口が一体となったカップ）の使用にも注意が必要です。これらを使っていると、いわゆる「哺乳瓶う蝕」というむし歯が発生しやすくなります。

これは、前歯を中心に急速に広範囲にわたってむし歯が見られるのが特徴です。

口の中で頻回にかつ長時間をかけてむし歯リスクの高い飲料が前歯に触れることが原因です。特に、砂糖を含む甘味飲料、ジュースなどはリスクが高く危険です。なるべく早い時期からコップによる飲水ができるようにしておくのがよいでしょう。

哺乳瓶のう蝕症状

卒乳の時期は親と一緒に考えて

ではいつまでの卒乳が望ましいのでしょうか。「授乳・離乳の支援ガイド」（厚生労働省）では、離乳の完成は生後12か月から18か月頃であり、母乳または育児用ミルクはこどもの離乳の進行及び完了の状況に応じて与える、とされています。

また、卒乳時期とむし歯の発生を調べた研究では、卒乳の時期が遅くなるほど、むし歯の発生が多いことがわかっています。そのため、むし歯予防の観点からは、離乳の完成時期、概ね１歳６か月までを目処にすることが望ましいということになります。

また、卒乳が遅い場合には、砂糖を含む菓子や飲み物を与える回数が多いこと、授乳の時間が夜間や就寝前が多いことから、むし歯リスクが高くなる生活習慣を併せ持っていることも指摘されています。その点でも注意が必要です。

ただし前述したように、卒乳、断乳は子どもの成長と発達具合、家庭環境や母親等の考え方などを尊重しながら判断する必要があります。１歳６か月でまだ授乳を続けているからダメ、ということではなく、むし歯のリスクを低くするような与え方や卒乳に向けてのアドバイスを親と専門職で一緒に考えながら、子どもの健やかな成長をサポートして見守っていければベストだと思います。

＜参考文献＞
卒乳時期とむし歯の関係 ： e-ヘルスネット（厚生労働省ホームページ）
公益社団法人 日本歯科医師会

地域保健委員会委員　糠信　安宏

8020 ひとくちメモ　水を飲めないこどもが増えている

最近、水を飲めないこどもが増えているという衝撃的なニュースが配信されました。一瞬どういうことかと耳を疑いますが、味のついていない飲料が苦手だというのです。

食事中でもジュースやコーラなどを好んで飲み、水分補給もお茶やスポーツドリンクなどで行い、水は飲まないということです。これは、コロナ禍で冷水器や水道水が飲めない時期があったり、熱中症対策としてミネラル分を含むスポーツドリンクや機能性飲料などの摂取がもてはやされているという理由もあるようですが、お茶はともかく甘味のついた飲料は糖分の含有量が多く、常飲すると糖分過剰摂取やむし歯の多発を引き起こします。また、普段からの水分補給としては水やお茶で充分で、特別な飲料は必要ありません。こどもの頃から味のついた甘い飲料を常飲させるのは味覚の異常を引き起こし、成人になっても悪影響を及ぼします。

水分補給や食事中の飲料は無糖の水やお茶を与え、たまのご褒美として甘味飲料を与えるというような対応が望まれます。

第45回 全国歯科保健大会 が開催されました

11月２日（土）、「～火の国・水の国くまもとから～人生100年時代 おいしく食べて豊かな人生」をテーマに、熊本城ホールにおいて第45回全国歯科保健大会が開催されました。

当日は、長年にわたり歯科保健の向上に尽力された個人や団体に対して、厚生労働大臣表彰、日本歯科医師会会長表彰の授賞式が行われました。

特別講演や熊本の高校生によるアトラクションなども披露され、多くの方々にご来場いただきました。

役立つ I.E.C. 優れもの

全国自治体では、令和６年４月より、こども家庭センターの設置が進み、こどもを中心にとらえ、母子保健と児童福祉をともに推進するために事業の創設や見直しが進められている中、母子保健事業にかかわるさまざまな職種、立場の方にご活用いただきたい２教材が全面改訂しました。

母子保健事業および関連する法律や児童虐待についての情報を詳しく解説しています。「母子保健地域活動ノート」は、全ページカラーで、児童虐待についてをより詳しく、「母子保健推進手帳」は２色印刷で文字・図表で解説しています。

令和６年４月 全面改訂

母子保健地域活動ノート

■A５判 80頁　■650円（税別）

カバー付き

母子保健推進手帳

■B６判 72頁２色　■800円（税別）

妊婦さんにそっと寄り添う
かわいいクマの親子のデザインが好評です

母子健康手帳ケース

■23.5×15㎝　■1,000円（税別）

多数割引を
年度末特別価格でご案内！
今すぐ見積もりご請求ください！

※合計15,000円（税抜）の場合、送料は無料となります。

お問い合わせ・お申込み
E-mail：bosui@bosui.or.jp
Tel：03-6902-2311
Fax：03-6902-2331

令和６年度 子育て世代支援者養成セミナーのご案内

視点や専門性、経験値の異なる方がともに対象者に寄り添う今、寄り添い型の支援について、理論と演習で学べる充実の２日間！

お問い合わせ・お申込み
E-mal：bosui@bosui.or.jp　TEL：03-6902-2311

期　日	令和７年２月14日（金）・15日（土）
会　場	東京都助産師会館5階　講堂
主　催	公益社団法人 母子保健推進会議
後　援	こども家庭庁　日本助産師会　全国保健師長会
対　象	保健師・助産師・保育士・自治体母子保健担当者等
受講料	5,000円（税込）　※日本財団助成による特別料金

※セミナー受講者には、修了証を授与します。

編集帖

11月21日(木)・22日(金)、鹿児島県で「健やか親子21全国大会(母子保健家族計画全国大会)」および併設集会を開催した(１～４ページで詳報)。本大会は半世紀以上の歴史ある大会だが、コロナ禍の令和２年度が中止に。３年度はハイブリッド(対面は県内者のみ)、対面での開催は令和4年度からの再開となった。

大会では、長年母子保健の向上に寄与してきた方、団体に対する表彰を行う。できるだけ多くの方と心からの祝意と敬意を表したい。活動展示のコーナーでは、今年も多くの方が手づくり教材に触れたり、作成した方と工夫点などの情報を交換する光景が見られた。そして、大会ならではとも言えるのが、久しぶりに会う、同じ熱い想いを抱く方々との再会ではないだろうか。次年度大会は、表彰行事はこども家庭庁で、他はオンラインとなるが、オンラインの良さを生かしつつ、いかに対面の良さを創出するか、参加される方々にご満足いただける方法を考えたい。　（Y）

発　行：公益社団法人　母子保健推進会議
発行人：鑓溝和子　編集人：髙村壽子
協　力：全国母子保健推進員等連絡協議会

東京都文京区音羽１－19－18
東京都助産師会館 4F（〒112-0013）
TEL.03-6902-2311　FAX.03-6902-2331
E メール bosui@bosui.or.jp
URL　http://www.bosui.or.jp

年間購読料 2,640 円（税〒込み）
母子保健推進員等特別価格
年間購読料 1,320 円（税〒込み）
郵便振替口座　00120-9-612578